

研究ノート

社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践 —ジェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とした理論的枠組みと実践—

Theoretical framework and practice of social work at social welfare institutions

— Theoretical framework and practice based on generalist social work —

中村 剛

要約: 今日においても福祉サービスの主要な場である社会福祉施設におけるソーシャルワーク理論を確立することは、実践力を高めるという観点からも、ソーシャルワーク実習を可能とするという観点からも、緊急の課題である。このような問題意識のもと、入所型社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践例を示すことが本稿の目的である。方法として、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とする、入所型社会福祉施設という場の特性を踏まえる、ソーシャルワークで用いられる方法・技法・アプローチを統合化する、といった観点を導入している。このような方法を用いて、社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みを空間的側面と時間的側面から示している。その上で、社会福祉施設におけるソーシャルワークの実践例を、寝たきり状態のAさんに対するソーシャルワークとして示している。

Key Word: レジデンシャル・ソーシャルワーク、社会福祉施設におけるソーシャルワーク、ジェネラリスト・ソーシャルワーク、個別支援計画、ソーシャルワーク実習

I. はじめに

入所型社会福祉施設におけるソーシャルワークはレジデンシャル・ソーシャルワークといわれる。これは、社会福祉施設におけるソーシャルワークは、ケースワーク、グループワーク、アドミニストレーションなどの方法を適用していたが、次第に施設という固有な生活形態を踏まえた総合的なソーシャルワークが必要であるとの認識から生まれた概念である（小笠原 1993：170，狭間 2007：369）。

小笠原（1993：170）はレジデンシャル・ソーシャルワークを、①日常生活援助としてのケアを基礎とした個別援助、②従来のケースワーク、グループワークなどのソーシャルワークの体系、③社会福祉運営管理法の3点からなるとしている。ただし、この分類は、レジデンシャル・ソーシャルワークを、①のケアワークと②③のソーシャルワークからなる、としているものであり、入所型社会福祉施設独自のソーシャルワークの理論が提示されているわけではない。

山辺（2002-a, 2002-b）は「社会福祉施設におけるソー

シャルワークの展開」について論じている。そこでは、入所型施設における生活課題を、「生活支援型援助」と「問題解決型援助」の2つがあるとし、後者に対応する援助技術としてソーシャルワークを位置づけている。その上で、ジェネラリスト・ソーシャルワークを活用することで、「生活支援を行いながら問題解決型援助を行うことについての概念的枠組みが明確化される」（山辺 2002-a：57）とし、母子生活支援施設におけるソーシャルワークの展開例を示している。しかしながらそれは、ソーシャルワークのプロセスに沿って展開されている例に過ぎず、必ずしも、理論的枠組みが提示されているわけではない。

最近では実習教育を論じるなかで、レジデンシャル・ソーシャルワークの内容についての試案が提示されている。川上（2009：166-168）はレジデンシャル・ソーシャルワークの特徴・実習経験・専門性を表に整理し提示するとともに、米本が整理した「ソーシャルワークの9機能」を紹介している。これにより、小笠原が示した内容よりは、レジデンシャル・ソーシャルワークの内容が明確になった。しかしながら、それらの内容の理論的根拠が不明確なため、理論的枠組みを提示するまでには至っていない。

このような現状に対して白澤（2009：21）は、「日本においては長いレジデンシャル・ソーシャルワークの歴史があるにもかかわらず、必ずしもレジデンシャル・ソーシャルワークを理論的に確立することができず、今日に至っているといえる」と指摘している。

現在、精神保健領域におけるソーシャルワーク、更生保護に関するソーシャルワーク、スクールソーシャルワークといったように、ソーシャルワークの具体的な活動領域を想定して、ソーシャルワークを社会の中に位置づけていこうという流れがある。しかしながら、日本における福祉サービスの実践力を高めるには、今日においても福祉サービスの主要な場となっている社会福祉施設におけるソーシャルワーク理論を確立することが急務である。さらに、具体的な問題点として、実践と教育という双方の観点から次の点が指摘できる。

実践における問題点は次の通りである。施設においても自立支援計画（児童）、個別支援計画（障害）、施設サービス計画・個別援助計画（老人）といった利用者一人ひとりに対する支援計画が位置づけられてきた。しかし、それらの計画の中で老人の領域に関しては「ケアプラン」という表現があるように、ソーシャルワークの計画ではなくケアワークの計画になりがちである。また、児童や障害の領域についても、利用者（ミクロレベル）に働きかける計画が多く、生活課題を改善・解決するために、施設そのものの運営（メゾレベル）に介入する計画や、施設の外部の社会資源を利用するといった外部環境（マクロレベル）に介入するような計画がどれほど定着しているのか疑問である。

一方、教育における問題点はいくつもあるが、ここでは次の1点に絞る。今日における実習教育は、職場実習・職種実習での学びを踏まえソーシャルワーク実習といえる学びをすることが課題となっている。社会福祉士の実習先については厚生労働省の告示により実習指定施設に定められている。しかし、その多くは社会福祉施設である。そのなかに入所型の施設も多く、実習生の多くは入所型施設で実習をしているのが現実である。すなわち、今日に至ってもレジデンシャル・ソーシャルワークが理論的に確立していないなか、入所型施設においてソーシャルワーク実習をするように求められているのである。このような現状では、個別支援計画やケアプランを学ぶのが精一杯であり、社会福祉施設におけるソーシャルワークを学ぶことは困難である。

このような問題意識のもと、社会福祉士教育における

「相談援助の基盤と専門職」や「相談援助の理論と方法」、あるいは「相談援助演習」で教示される様々な方法・技法・アプローチの整理を可能とし、そのことにより、入所型社会福祉施設の職員やそこで実習をする学生が参照できる「社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組み」と「実践内容の例」を提示することが本稿の目的である。なお、本稿で採り上げる社会福祉施設とは入所型の社会福祉施設である。

II. 方法

本稿では、以下の3つの観点から社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みを構築する。

①ジェネラリスト・ソーシャルワークの導入

ソーシャルワークにおいて共通する生活課題の捉え方、利用者理解、支援の展開の仕方を整理して体系的に示したものがジェネラリスト・ソーシャルワークである。入所型社会福祉施設におけるソーシャルワークにしても、それがソーシャルワークである限り、ジェネラリスト・ソーシャルワークという基盤をもつ。よって、この基盤を社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践の基盤とする。

②入所施設という場の特性を踏まえる

入所型社会福祉施設という場は、そこにおける目的や固有な状況がある。それらを踏まえ、社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みを構築していく。

③ソーシャルワークで用いられる方法・技法・アプローチの統合化

ソーシャルワークでは様々な方法・技法・アプローチが用いられる。そして、ソーシャルワークに関するテキストには、それらの方法・技法・アプローチが解説されている。ここでは、それらの方法・技法・アプローチが社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みのなかで、どのように位置づけることができるのかを明確にする形で理論的枠組みを構築していく。

III. 社会福祉施設とソーシャルワーク

本稿では、社会福祉施設という場で用いられるソーシャルワークについて考察する。しかし、外部から社会福祉施設を見るならば、それはソーシャルワークにおいて用いられる社会資源の1つである。最初に、この点について確認する。

1. 社会資源の1つとしての社会福祉施設

地域（在宅）において、何らかの理由で生活を営むこ

とが困難な人がいる。それらの人に対して、様々な在宅サービスを提供しても、生活が困難な場合がある。そのような人が児童相談所や福祉事務所を訪れたとき、そこにいるソーシャルワーカーは施設への措置、あるいは要介護度や障害程度区分認定を経たあと、施設入所が必要な場合、利用できる施設を紹介する。

このようにして、児童相談所や福祉事務所のソーシャルワーカーは、在宅で生活することが困難な人に対して、施設という社会資源を活用することで、その生活課題の改善・解決を図る。すなわち、児童相談所や福祉事務所のソーシャルワーカーにとって施設は、活用可能な社会資源の1つとして位置づいている。

2. 施設におけるソーシャルワークが取り組むべき生活課題

施設に入所することで、困難だった生活ができるようになり部分的に状況は改善する。しかし、その人が抱えていた課題が施設を利用することで、完全に解決するわけではない。施設入所は、課題解決の1つの段階に過ぎず、その後の課題としては、大別すれば次の3つがある。

- ①再び施設の外で暮らすために取り組む必要がある課題。
- ②施設での暮らし自体を、可能な限り、地域での普通の暮らしに近づけるために取り組む必要がある課題。
- ③個別的な生活課題。例えば、行動障害への対応、対人関係の調整、社会生活上の技能の習得、心身の安定、家族との関係調整などのなかで、必ずしも①の課題にはならないが、対応する必要がある課題。

これら①～③の課題が、主として施設におけるソーシャルワークが取り組む必要がある生活課題である。具体例を示せば次のようになる。

- (1) 再び施設の外で暮らすために取り組む必要がある課題。

①虐待で入所した児童の心理的ケアと保護者との関係の回復。②精神障害や情緒障害の治療。③行動障害の軽減。④対人関係や社会生活上の技能の習得。⑤就労に必要な生活態度と技能の習得。

- (2) 施設での暮らし自体を、可能な限り地域での普通の暮らしに近づけるために取り組む必要がある課題。

①プライベートな時空間の確保。②少人数での暮らしの実現。③その人に合った生活リズム。④職員の不適切

な対応をなくす。⑤外出する機会の確保。⑥外部の人と交流する機会の確保。

- (3) 個別的な生活課題。

上記の「2-③個別的な生活課題」に例示した内容。

3. 基礎となるジェネラリスト・ソーシャルワーク

入所施設におけるソーシャルワークにしても、施設以外で用いられるソーシャルワークにしても、ソーシャルワークである限り共通したものの見方・枠組みがある。その主なものは以下の通りである。

- (1) 人と環境との交互作用（エコロジカルな視点）

生活課題は、必ずしも個人に要因があるわけではなく、個人的要因と環境的要因の交互作用により生じている。

- (2) 利用者に対する見方（エンパワメントの視点）

人間一人ひとりには、自尊感情をもち、他者を信頼し、自らの課題解決に向けて取り組んでいくことができる力・可能性を潜在的に有している。

- (3) プロセス

ソーシャルワークには、インテーク（関係形成）→アセスメント→プランニング→介入→モニタリング→評価→再計画 or 終結、というプロセスがある。

- (4) 介入の次元

生活課題は、個人的要因と環境的要因の交互作用から生じる。そのため、生活課題を解決するためには、次の3つの次元のどこに、どのように働きかければいいのかを考える必要がある。

- ①ミクロレベル…本人や本人が日常接している人々に働きかける。
- ②メゾレベル…本人が属し最も影響を受けている集団（在宅なら家族、入所施設なら施設という組織）に働きかける。
- ③マクロレベル…本人が属している集団の外部である地域や外部の組織、様々な社会制度に働きかける。あるいは、必要な社会資源を開拓する。

上記(1)～(4)のうち、エンパワメントやプロセスはケアワークにおいても同様にみられるものであり、ソーシャルワークの固有性は、むしろ(1)(4)と見るべきである。

大竹(2002:167)は「社会福祉施設とソーシャルワーク」という項目を説明するなかで「まさにミクロ、メゾ、マクロレベルでのソーシャルワークを展開する機関として期待されている」と指摘している。

プロセス、介入の次元、そして、エコロジカルな視点とエンパワーメントの視点を踏まえて、以下では入所型社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みを提示する。

IV. 施設におけるソーシャルワークの空間的理解

施設における生活課題を改善・解決するためには、いくつかのソーシャルワークの方法が活用できる。社会福祉施設におけるソーシャルワークの空間的理解を図るためには、それらをまず、利用者の生活課題への働きかけと、保護者のニーズあるいは地域のニーズへの働きかけとに分ける。そして、前者についてはミクロ・メゾ・マクロの対象に直接働きかける方法と、職員集団に活用される間接的な方法とに分ける。このような区分に基づくと、社会福祉施設におけるソーシャルワークの空間的理解として図1を提示できる。

V. 施設におけるソーシャルワークの時間的理解

施設における生活課題を改善・解決するためには、先に述べたようなプロセスのもとに支援は展開する。そのプロセスの各局面において用いられる専門的な技法や知識・能力を整理すると次のようになる。

1. 関係形成

①コミュニケーションの技法 ②面接の技法

2. アセスメント

①生活課題は人と環境との相互作用から生じているとみる視点 ②利用者の障害特性についての知識 ③活用可能な社会資源についての知識 ④マッピング技法 ⑤何が主訴なのかを見極められる能力

3. プランニング

①本人自ら課題に取り組んでいく力・可能性を有しているとする視点 ②利用者の参加を促し協働していく技法 ③どの次元（ミクロ・メゾ・マクロ）に介入すればよいのかを理解する能力 ④本人に直接対応する（ミクロレベル）療法・アプローチに関する知識と技法 ⑤組織の運営管理（メゾレベル）に関する知識と技法 ⑥社会資源の活用・調整（マクロレベル）に関する知識と技法 ⑦必要な社会資源を開発（マクロレベル）する技法

4. 介入

①利用者の意欲を高める技法 ②記録技法 ③チームアプローチ

5. モニタリング

①ケースカンファレンス ②スーパービジョン

6. 評価

①評価の技法

以上の施設におけるソーシャルワークの空間的理解と時間的理解が、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とした施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みであると考えられる。

VI. 施設におけるソーシャルワークの固有性（特徴）

入所施設におけるソーシャルワークは、ソーシャルワークである限り、他のソーシャルワークと共通するジェネラルな側面がある。しかし、その一方で、入所施設以外の場で行われるソーシャルワークとは異なる、入所施設固有の特徴がある。それは、施設の目的、施設という場の構造、そして、施設利用者の特性から導かれるものであり、その内容は次の通りである。

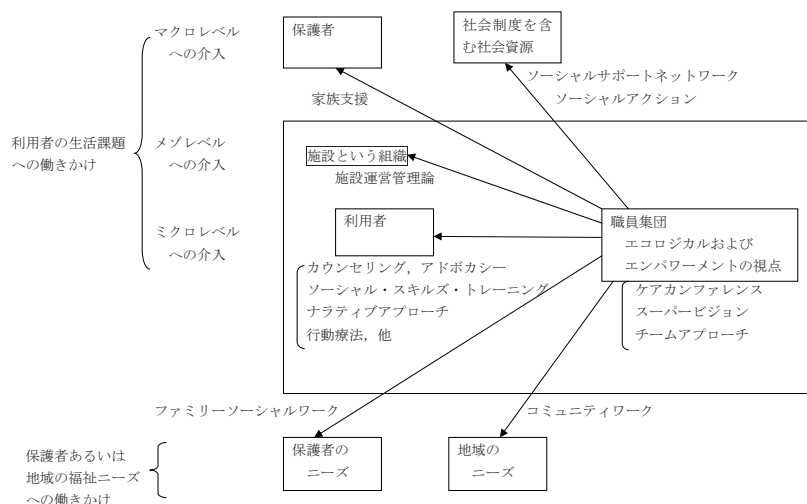


図1 施設におけるソーシャルワークの空間的理解

1. 退所に向けたソーシャルワーク

入所施設は、特別養護老人ホームのように現実的にはそこが「終の住みか」となる施設もあるが、基本的には「通過施設」である。すなわち、多くの入所施設では、再び施設ではない所で暮らせることが最終的な生活課題となる。そのためには何をどのようにすればいいのかという、施設におけるソーシャルワークに固有な価値・知識・技法を明確にする必要がある。

2. 地域における生活と同様な暮らしを実現するためのソーシャルワーク

入所施設は、地域での普通の暮らしとはだいぶ異なる生活となる。そこでの暮らしは、数か月あるいは1～2年ではなく、5年以上となる人も多く、数十年となる人も少なからずいる。施設での暮らしは、その長い期間、地域における生活とは異なる生活を余儀なくされるのである。そのため、施設での暮らし自体を地域における普通の暮らしに近づけるために必要な価値・知識・技法を、施設におけるソーシャルワークの固有性として明確にする必要がある。

3. 障害特性を踏まえた障害の重い人へのソーシャルワーク

在宅での生活が困難となる要因には、認知症、いわゆる「寝たきり状態」、多動・自傷・他害・徘徊などの行動障害、といった障害の程度が重い人や対応困難事例が少なくない。また、虐待という環境のなか情緒障害や「深い心の傷」を負っている児童もいる。

入所型施設でのソーシャルワークは、このような比較的障害の重い人を対象とする。なかには、ソーシャルワークが想定している「自己決定」「自ら環境へ対処していく力」を欠いている人が少なからずいる。そのため、施設におけるソーシャルワークは、認知症、いわゆる「寝たきり状態」、多動・自傷・他害・徘徊などの行動障害をもった人たちの障害特性を十分に踏まえ、また、それらの人びとの気持ちを十分に汲み取った上で、その人が抱える生活課題を改善・解決できる専門的な価値・知識・技法を明確にすることが必要である。

VII. 特別養護老人ホームにおけるソーシャルワークの一例

－「寝たきり状態」のAさんに対するソーシャルワーク－

特別養護老人ホームには、いわゆる「寝たきり」といわれる状態の人がいる。これらの人に対する支援は主と

して、食事介助、入浴介助、着替えの介助など、ケアワークが中心となっている。では、「寝たきり状態」の人に対して、ソーシャルワークは必要ないのだろうか。以下では、施設におけるソーシャルワークは「寝たきり状態」の人に対しても有効である例を示す。

ここに示す事例（この事例は、施設におけるソーシャルワークを説明するために作られたものである）は、施設に入所し3年たち、認知症を発症している85歳の女性Aさんとする。ソーシャルワークの最初の局面は、インテーク（エンゲージメント）から始まるが、入所して3年経っているAさんと施設の職員は、一定程度の関係ができているため、以下では、アセスメントの局面から説明する。なお、紙面の関係から説明は、アセスメント、プランニング、介入の局面に限定する。

1. アセスメント

アセスメントとは、利用者と環境に関する情報を収集整理することを通して、そこに生じている生活課題（ニーズ）を理解するとともに、支援の方向性を見出す作業である。

入所施設におけるソーシャルワークのアセスメントをする場合も、本人の意向を踏まえることが大前提である。その上で、顕在化しているニーズと潜在化しているニーズを区別し、それらを見極める必要がある。

この事例におけるAさん意向は、「もっと話がしたい」というものであると仮定する。この仮定のもと、以下では顕在化しているニーズと潜在化しているニーズについて確認する。

（1）顕在化しているニーズと潜在化しているニーズ

顕在化しているニーズとは、生活をする上での必要性が目に見える形で理解されるものである。「寝たきり状態」の人の場合、食事介助、入浴介助、着替え介助などの日常生活を送る上で必要とされることが、顕在化しているニーズである。これに対して潜在化しているニーズとは、尊厳の保持、本人意思の尊重、ノーマライゼーションといった福祉理念と現在の生活を比較したときにはじめて、「欠けている」と理解されるニーズである。

ここでは「寝たきり状態」のAさんに対して、「この人、またこんなに便をしている。いやになっちゃう」といった発言が職員から聞かれたり、ただ単に介護の対象とされるだけで、人としての声かけや関わりがされていない状態があると仮定する。これは潜在的なニーズの1つである。また、本人の意思を汲み取ろうという姿勢が職員にほとんどないと仮定する。これも潜在的なニーズである。

アセスメントの第1段階は、顕在化しているニーズと潜在化しているニーズの双方を理解することである。

(2) ニーズを生みだしている要因とその原因の分析

顕在化しているニーズにしても潜在化しているニーズにしても、それらのニーズはAさんという個人とその環境の相互作用から生じている。

Aさんが「寝たきり状態」でなければ現在のニーズは生じていない。そのため、Aさん本人との話し合いのもと、「必要なりハビリをする」といった個人への介入もあり得る。しかしながら、「寝たきり状態」のAさんが変容しうる可能性は限られている。そのため、上記(1)で挙げたようなニーズを生みだしている要因は、主として職員という環境に求められる。

では、なぜ職員は不適切な発言をしてしまったり、Aさんに声をかけをしないのだろうか。また、本人の意思を汲み取ろうとしないのだろうか。以下では、これらの点の原因(理由)と思われる点を列挙する。

①不適切な発言をしてしまう理由

- ・人間の尊厳という、ソーシャルワークの根源的な価値に対する理解が職員に不足している。
- ・不適切な関わりをしている職員を見ても、それを指導したり指摘し合えない。
- ・外部の目がないという入所施設の閉鎖的な構造。

②Aさんに声をかけない理由

- ・人間には、人から声をかけられたり何らかの形で認められたり、あるいは感謝されたりといった「承認」が生きていく上では大切であることや、「承認」が尊厳の保持には欠かせない要因であることが理解されていない。
- ・介護をはじめ職員がしなければならないことが多く、その仕事量に対して職員が少ない。

③本人の気持ちを汲み取ろうとしない理由

- ・本人意思を尊重することが、尊厳の保持の重要な要因であることが理解されていない。
- ・生活場面面接のような、本人の気持ちを汲み取るための技法が習得されていない。

(3) 活用可能な社会資源の確認

上記(1)で挙げたようなニーズに対応する上で、活用できる社会資源にはどのようなものがあるのか確認する。

Aさんのニーズのうち顕在化しているニーズに対して活用できる社会資源は職員である。明確にすべきことは、潜在化している尊厳の保持や本人意思の尊重に関す

るニーズに対して活用できる社会資源である。

この場合、活用可能な資源には、尊厳の保持の大切さ、あるいは、それらを保障するための取り組みについて紹介している文献、施設内外の職員研修会がある。また、これらのことについて指導・助言してくれる研究者も活用可能な社会資源である。

以上の結果を踏まえ、Aさんのニーズ(生活課題)を確認するならば、「Aさんの顕在化しているニーズは、食事介助、入浴介助、着替え介助などの日常生活を送る上で必要とされることである。一方、潜在化しているニーズは、職員による不適切な発言、話しかけてもらえないような環境、および本人の気持ち・意思を汲みとろうとする取り組みがない環境といった、人としての尊厳を保持するために必要とされることが欠如していること」となる。そして、支援の方向性は、上記の(2)と(3)を踏まえたものとなる。

2. プランニング

支援の方向性を踏まえ、目標とその目標を達成するために求められる方法を設定するのがプランニングである。

(1) 目標の設定

目標は、本人の意向を尊重し設定する。ただし、本人の意向が将来、著しく本人の健康を害したり、他者に明らかに迷惑がかかるようなものである場合は、本人と話合い、可能な限り本人が納得できる目標にする。

Aさんにとっての目標は本人の意向を踏まえれば、「職員による不適切な関わりがなくなり、話をしたり、本人の気持ちを汲み取ってもらえるような環境になる」ことである。

通常、目標には長期目標と、その目標を達成するために必要とされる短期目標が設定される。しかし、ここでは説明を簡略化するために長期・短期という区別を設けない。ただし、上記の目標文は目標の達成が評価しにくく、また、幾つかの内容によって構成されている。そのため、目標文を具体化し、かつ、次のように3つの目標に分ける。

①職員は、「この人、またこんなに便をしている。いやになっちゃう」といったような不適切な発言や態度は採らない。

②Aさんに対し、今日の出来事やAさんの関心のあることなどの話しかけを毎日行う。

③Aさんの気持ちや意思を月に3回は汲み取るように

働きかける。

(2) 方法の設定

方法の設定は、ニーズ（生活課題）を生みだしている要因を踏まえ、必要な次元（ミクロ・メゾ・マクロ）に介入する。そして、介入の仕方は、生活課題の原因を踏まえ設定する。

①の目標に対して、

この目標に対しては、まず、人間の尊厳という、ソーシャルワークの根源的な価値に対する職員の理解不足を、職員研修等を通して解消する必要がある。さらに、不適切な関わりをしている職員を見た場合、それを指導したり指摘し合える文化を職場内に創っていくことや、外部の目がないという入所施設の閉鎖的な構造を変えていくことが必要である。

これらのことを踏まえると、この目標を達成するためには、Aさんにとっての環境である職員集団（職員自身の集団）に介入する必要がある。その介入の仕方は次のようなものである。

- ・人間の尊厳と人権に関する研修会を開く。また、そのようなテーマの研修会（外部研修）に参加する。
- ・職員同士で互いに、不適切な関わりがないか確認し合い、あった場合は指摘するようにする。
- ・日常的に來ている実習生という第三者に、自分たち（職員）のAさんに対する関わりが不適切でないか確認する。

②の目標に対して、

②に関しても①の目標と同じく、尊厳に対する理解を深めること、特に、一人ひとりの人がかけがえのない人格存在であることや、承認や本人意思の尊重が尊厳を構成する重要な要因であることを学ぶ。

さらに、Aさんに声かけをしたり、会話をする人は、職員以外の人も考えられる。すなわち、施設の外部環境（マクロ）である地域のボランティア（社会資源の1つ）を開拓する、という視点も必要である。これらを踏まえると、具体的な方法としては、以下のものが考えられる。

- ・職員研修等を通して、尊厳に対する理解を深める。
- ・ケース担当と職員A、Bの3人は、出勤した日は必ずAさんに話しかける時間を設ける。
- ・会話ボランティアを募る。

③の目標に対して、

この目標に対しては、意思を汲み取る機会の設定と、意思を汲み取る方法の設定が必要となる。具体的には、以下のような方法が設定される。

- ・ケース担当は毎月、Aさんの気持ちを汲み取る日を設定し実施する。
- ・方法は生活場面面接の技法を使う。
- ・実施した内容は、その都度記録をする。

3. 介入

先に立案した計画を、ミクロ・メゾ・マクロという介入の次元に分けると次のようになる。

(1) ミクロレベル

- ・ケース担当と職員A、Bの3人は、出勤した日は必ずAさんに話しかける。
- ・ケース担当は、毎月、Aさんの気持ちを汲み取る日に、生活場面面接の技法を使い、Aさんのその時々のお気持ちや意思を汲み取る。そして、実施した内容は、その都度記録をする。

(2) メゾレベル

- ・人間の尊厳についての理解を深めるための研修会を開く。
- ・職員同士で互いに、不適切な関わりがないか確認し合い、あった場合は指摘するようにする。

(3) マクロレベル

- ・日常的に來ている実習生という第三者に、自分たち（職員）のAさんに対する関わりが不適切でないか確認する。
- ・人間の尊厳や人権に関する外部研修に参加する。
- ・地域の自治会やボランティアセンターに、Aさんのところに会話ボランティアとして継続的に來てくれる人はいないか依頼する。

VIII. おわりに

今後は、レジデンシャル・ソーシャルワーク、ジェネラリスト・ソーシャルワークおよび日本の社会福祉施設に関する先行研究を改めて調べることで理論的な妥当性を高めていく必要がある。そして、これらの理論的検証作業を済ませ、一定程度理論的妥当性が検証されたならば、次に、この理論的枠組みを使って行えるソーシャルワーク実践の事例を一定数集め、実践的妥当性を高めていく必要がある。これら理論的かつ実践的な検証作業を積み重ねていくなかで、社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みを明らかにしていきたい。

文献

- 狭間香代子 (2007) 「レジデンシャル・ソーシャルワーク」 山縣文治・柏女霊峰編『社会福祉用語辞典 第6版』ミネルヴァ書房, 369.
- 川上富雄 (2009) 「第6章 実習指導方法・Ⅱ 実習プログラミング」社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト』中央法規出版, 148-204.
- 小笠原祐次 (1993) 「施設ソーシャルワーク」京極高宣監修『現代福祉学レキシコン』雄山閣出版, 170.
- 大竹 智 (2002) 「社会福祉施設とソーシャルワーク」黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編『福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク』中央法規出版, 166-7.
- 白澤政和 (2009) 「第1章 第4節 ソーシャルワークの職場」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座7 相談援助の理論と方法Ⅰ』中央法規出版, 19-22.
- 山辺朗子 (2002-a) 「社会福祉施設におけるソーシャルワークの展開についてー母子生活支援施設における自立生活支援を中心として その1」『龍谷大学社会学部紀要』(20), 55-61.
- 山辺朗子 (2002-b) 「社会福祉施設におけるソーシャルワークの展開についてー母子生活支援施設における自立生活支援を中心として その2」『龍谷大学社会学部紀要』(20), 80-88.